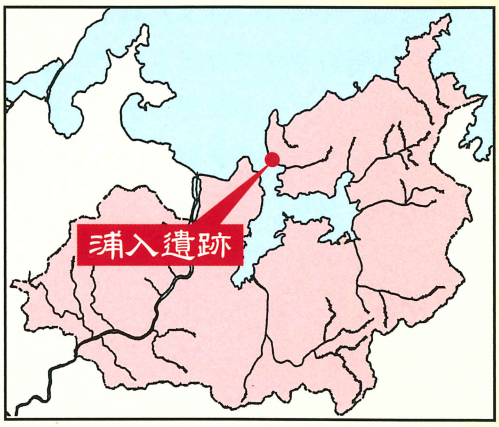
浦入遺跡（うらにゅういせき）

縄文時代の丸木舟

場所：舞鶴市字千歳



丸木舟出土状況

平成10年2月に舞鶴市の北東部にある大浦半島の西端に位置する浦入遺跡で縄文時代前期後半の丸木舟1艇が発見されました。浦入遺跡は外海である若狭湾から舞鶴湾へ入ってすぐの位置にあり、丸木舟は南に開ける浦入湾の西岸、南東に延びる砂嘴によって入口は狭く波穏やかな浦入地区西岸の砂嘴の付け根部分から出土しました。

丸木舟は地表下0.5mの当時は外海であったことが分かる白い砂の中に舟尾を外海側の西方へ向けて海岸線と平行に埋まっており、出土した土器や化学分析によって縄文時代前期後半の約5,330年前のものであることが分かりました。その後の縄文時代中期にも丸木舟の周辺からは杭や碇石も見つかっていることから、この地点に桟橋のようなものがあったと考えられます。

この丸木舟はスギ製で船尾部分が残っており長さ4.3m、幅0.9m、深さ0.3m、厚さ5cmが残っていましたが、復元すると長さ8m～9m、幅1m弱の大きさのもので全国的にも最大級のものであり、出土した地点が海に面していることから日本海へ漕ぎ出していったことが分かる初の外洋航海用の丸木舟です。この丸木舟には杉の丸太を石の斧で削ったり、焦げた跡が残ることから火で焦がしながら造られたものと考えら

れています。

縄文時代には、日本列島全域にわたるような遠隔地交易が存在し、ヒスイ製玉類をはじめ黒曜石やサヌカイトなどの石器用材などが特産地から港を経由して遠くの消費地へ運ばれていたとされています。浦入遺跡でも北陸や東海地方の特徴をもつ縄文土器、富山県産蛇紋岩製の磨製石斧や大型の耳飾り、コハク製の玉類、島根県隠岐産の黒曜石が出土しており、山陰地方や北陸地方へこの舟を利用して遠隔地との交流が行われていたことが分かります。その他にも、浦入遺跡からは石錘も出土し、丸木舟を使って海に出て漁労も行っていたことが想定されます。

大海原を介するこの広範な交易ネットワークには、外洋航行用の大型丸木舟が不可欠であり、浦入遺跡出土の丸木舟の発見は、日本海沿岸や東シナ海にわたる「海の道」を使って交流した東アジアの文化的交流を具体的に考える上での極めて重要な発見といえます。

丸木舟出土地点

浦入遺跡出土 玉類

縄文丸木舟